〔論文〕

教育危機打開の方策に関する一考察

稲 井 廣 吉*

―― 目 次 ――

はじめに
1．危機に立つ日本の教育
2．教育危機の根本原因の究明
3．明治の教育近代化の功績面
4．明治の教育改革を補完する平成の改革
あとがき

キーワード：明治の教育改革の補完、片足歩行から２足歩行の教育へ、家庭教育のキリスト教教育化。

はじめに

日本の教育が今日、曾てない教育危機に直面していることは、誰しも強く感じているところであると思われる。困難な問題であるだけに、それをどのような教育方策によって解決していくかについては、さまざまな意見があることと思う。

本稿は、一方では今日の近代教育の基礎を築いた明治の偉大な先覚者たちの業績を受け継ぐ内容のものであると同時に、他方では、明治の先人たちが当時の国

＊ Hiroyoshi INAI　香川大学名誉教授、元四国学院大学教授、教育学博士

内事情のため果たせなかった部分を補完していく方向で問題の解決にアプローチしようとするものである。いわば明治の近代化を第一とすれば、それに対する平成の第二の近代化を目指して、教育危機への対処の仕方を論じたものである。

筆者は1974年から1991年まで四国学院大学に勤務し、主として教育社会学の講義を担当していた。そのような関係から、今日の教育の危機的状況を憂え、本学の在学生ならびに卒業生に対して、筆者の考える教育的打開策を開陳したものである。一世紀半近くを経過した平成の子孫のわれわれが切実に希求する教育方策の指針になってくれるものと信ずる次第である。

1．危機に立つ日本の教育

(1) 深刻な教育諸問題の発生

日本は今日、次に述べるような諸点で、明治５年（1872）の教育近代化政策以降曾て経験したことのない深刻な教育諸問題の発生に苦悩している。

(a) 少子化問題

報道によれば2005年の総人口は約１億2700万人に達するが、2006年をピークにして人口は減少に向かい、これまで経験したことのない「人口減少、少子高齢化時代」に突入することになるという。今後人口の減少と少子化のスピードが加速されていけば、日本の発展を切望する私たちにとっては、青少年の一人ひとりがかけがえのない大切な存在であるという認識をますます強く持つであろうことは疑いのない事実といえる。

次代を担う若い人たちの数の減少に追い打ちをかけるのが、青少年の自殺者の多いことである。日本の青少年の自殺率は先進国の中でも高く、いのちの電話に訴えてくる自殺志向に関する相談件数はここ数年急増しているという。最近では、インターネットで知り合った青年男女が集団で自殺する「ネット自殺」が多発しているようであるが、この場合には一挙に数人の大事な若者が失われていくわけで、大切な家族を失う家庭はもとより、国家社会の観点からも大きな損失であるといえる。

若者世代に起きている問題は、こうした数の減少という面だけに止まらず、さらに深刻な質的問題をもはらんでいるのである。

(b) 青少年による犯罪や非行の増加とその凶悪化

報道では、2004年一年間に殺人や強盗で補導された14歳未満の少年は、前年比3.3％の増加を示しているということである。また他方、万引き、自転車盗、飲酒、喫煙等の遊び半分の非行も増加傾向にある。

(c) 生徒の基礎学力の国際的低下傾向

最近では青少年の質的低下傾向は、徳育面に限らず知育面にまで及んできている。国際的な学力調査においては、日本は高度成長期には世界の一位、二位を占めていた。ところが2005年に行われた国際数学理科動向調査では、日本の小学校理科と中学校数学の平均点が、前回よりも10～９点下回った。国際的にはまだ上位を維持しているとはいうものの、国際比較調査の結果、日本の子どもたちは学力（基礎・基本の力、実生活への応用力および学習への興味・関心）の低下の傾向を示している点が注目される。

以上のように我が国の子どもたちの学力は、低下傾向にある。日本の教育は、徳育の面だけでなく知育面でも危機に立っているといえるのである。

(2) 家庭教育と学校教育の危機的徴候

青少年育成の場は徳育の面では家庭教育、知育の面では学校教育が関わっている。したがって上述のような青少年の道徳的、知的ゆがみは、今日の家庭教育や学校教育が大きな問題を抱えていることを示唆しているといえよう。

まず、家庭教育から考察することにする。

最近の新聞報道で家庭教育上注目される事件は、中学生の子どもによる父母への殺傷事件と、父母による子どもへの虐待や殺傷事件である。報道されているところによると、日頃家庭教育に熱心なあまり「勉強しろ、勉強しろ」と口癖のように言って子どもをしつけていた父母たちが、中学生の子どもに殺傷されているのである。子どもの成績はむしろ良い方で、中には優秀な子どももいるようであ

る。そうした家庭は経済的には普通以上で、しかも教養があるか、教育に関心の強い親が多い。次のような家庭における教育のあり方が日本の今日の一般的な家庭教育方式となっているのではなかろうか。子どもを早く出世コースの軌道にのせてやるために、まず有名校に進学させようとする。そのために子どもの人格形成への配慮をおろそかにし、ひたすら学業成績の向上のみに力を注ぐのである。子どもが学校から帰宅するとすぐ進学塾に追い立てる。家庭内でも勉強一点張りで、家事の手伝いなど一切させない。子どもが机の前に座っていれば、徳育の面も健全に身についていくものと錯覚して安心してしまう。そのような全く知育中心の家庭教育である。このような人格形成や徳育観念の乏しい今日の家庭教育が、子どもによる父母の殺傷や子どもに対する父母の虐待のような事件を多発させているといえよう。家庭教育の場での主体である親と客体である子とが、互いに生命を奪い合うというゆゆしい事態に至っているのであるから、日本の家庭教育は崩壊に瀕しているといっても過言ではない。

他方また、学校教育の危機的徴候も看過できない状況になっている。先日のＮＨＫのＴＶ放送によると、最近の小中学校では、教育経験の豊富なベテラン教師の退職希望者が急増しているということである。毎日の授業やクラスの運営に当たる先生方が、道徳性の欠如した児童生徒を扱うことの難しさに日々直面し、深刻なストレスを抱え込んでいるという現実がある。その結果、教えることに自信を失い体調不良に陥ってしまう先生方が続出しているというのである。

ちなみに文部科学省の調査によると、児童が学校内で起こした暴力行為は、1977年度の調査以降、２年連続で過去最多を更新していることが判明したという。校内暴力は最近では中学校から小学校へと年齢低下の傾向を示している。中でも教師への暴力が増加傾向を見せていることは、ベテラン教師が退職を希望する大きな理由の一つとなっていると推測される。報道によると、校内暴力を行う児童は、成績の良い幼児的性格の持ち主であることが多いと分析されているようだ。徳育を欠いた、知育中心の過保護の家庭教育が子どもたちをスポイルしているのは明らかである。このような家庭の子どもが多くの場合、攻撃的な傾向を見せているといえるのである。

したがって、今日の学校教育の危機的徴候の原因は、家庭教育が本来の任務である徳育の機能を果たさず、知育中心の教育に堕してしまっている点にあるとい

える。一言で言えば家庭教育の知育化であり、換言すれば徳育機能の喪失である。

2．教育危機の根本原因の究明

(1) イギリスの家庭教育

1970年代の後半の頃だったと思う。日本では選挙の度ごとに選挙違反が多く、一向に減少する気配を見せない時期が続いていた。そのため日本の公安委員会は、選挙違反対策の参考とするために専門家を英国に派遣し、イギリスの総選挙についての選挙違反状況や取り締まり対策の方法について調査させたことがあった。筆者も当時は明るい選挙推進協議会の県会長の職にあったので、その調査結果に多大の関心と期待を抱いていたのである。ところがその帰朝報告は意外にも「イギリスでは、選挙違反が全くない。ないから対策などは不要である。したがって取り締まり方法を尋ねてもその答えなどあるはずがなかった」というような呆気ないものであった。当時の日本は、夜でも女性が安心して一人歩きできた時代であったし、農村などでは日中は戸締まりを全くしないで田や畑に出て働いていたような治安の良い国柄であった。そうした安全安心な我が国で、選挙違反が跡を絶たなかったのであるから、社会基盤が充実し安定していたイギリスにおいても選挙違反くらいは当然のごとくあるはずだと予想していた。ところが全く逆の結果だったので、唖然としたのである。

そこで改めてイギリス国民の道徳性について調べてみると、例えば『平塚益徳講演集Ⅲ』などには、「英国民は、世界でも屈指の道徳性の優れた国民である」「人格養成がイギリス教育の出発点であり、到達点である」という趣旨の讃辞が見られる。このようにイギリスの家庭教育は徳育中心の教育を徹底的に実践しているといえるのであるが、それとは対照的に日本の家庭教育は知育中心であって、このために家庭崩壊の危機すら招きつつあるというのが現状なのである。イギリスの父母は「お宅のお子さんは頭がよい」と言われても、日本の親のようには喜ばないという。頭脳明晰な子どもには、それに見合う強い道徳心が伴わなければいけないと考えるためであるようだ。知識は豊富にあっても道徳心を伴わなければ、却って害になるとの危惧があるのであろう。そのため「お宅のお子さんは人

柄がよい」というのが父母への最高の誉め言葉になるらしい。

イギリスは、西欧独特の個人主義（利己主義とは本質的に異なる）の国である。すなわち個人の自律を道徳教育の最終目的とするのである。それと同時に、徳育の大切な要素である隣人愛や利他心を強調する愛国心の強い国でもあることは周知の事実である。

(2) 明治期における西欧の教育のとり入れ方が根本原因

以上述べてきたように、日本の家庭教育が知育中心であるのに対して、英国の家庭教育は道徳教育中心である。日本が明治期の教育近代化の際にモデルとしたのは、英国はじめ独・仏・伊等の西欧の教育制度であるといわれている。にも関わらずどうして今日、日英の教育の間にこれほどの大きな違いが生じてきたのであろうか。ここで気づくことは、明治の日本がとり入れた教育は西欧のモデルそのままではなく、日本の当時の国情に合わせて取捨選択したものであったということである。そのため自ずから西欧のモデルとはかなり異なったものになったにちがいないと推察できるのである。今日における日英の家庭教育の相違はそのためであると考えられるのである。

それでは日本がモデルとした明治維新当時の西欧の教育は、どんな教育体制をとっていたのか、それをモデルにした日本はどのようなとり入れ方をしたのかが、次の重要な問題となってくる。

(a) 維新当時の西欧の教育体制

① 西欧の二大教育思潮

この点については、幸いにも筆者が四国学院大学在任中に執筆した二つの論文があるので、それによって概要を述べることにする。論文の一つは「ヒューマニズムの教育とキリスト教の教育」（四国学院大学『五十周年記念論文集』 1983年）であり、他は「二つの教育についての史的考察」（四国学院大学『論集』1985年）である。

明治維新当時の西欧の教育体制は今日も変わらず行われているのであるが、遠く2000余年以上も前からギリシャの教育を源流として行われてきたヒューマニズ

ムの教育と、ヘブライの教育を源流として行われてきたキリスト教の教育との、２本の足を用いて歩む２足歩行の教育体制を保持していた。明治日本の近代化教育のモデルとなった、西欧の二つの教育（２本の足）のそれぞれの教育的特徴を分かりやすく一覧表にして示すと、第１表のようになる。

第１表　西欧の二つの教育の特徴

項　　目	ヒューマニズムの教育	キリスト教の教育
教育類型	◦世俗の教育	◦宗教教育
教育の源流	◦ギリシャの教育	◦ヘブライの教育
世界観	◦人間中心	◦神中心
人間の本性	◦性善説	◦原罪説
教育態度	◦過保護、不干渉、放任	◦厳格と愛情
教育の対象	◦青少年	◦成人、青少年
人間形成の主領域	◦知育	◦情意の教育（徳育）
教育目的	◦文化の創造と社会の発展に寄与する理性的、自己開発型人間の育成	◦信仰心に富んだ没我的、利他的人間の育成
教育方法	◦自己中心の自力的方法による	◦絶対者中心の他力的方法による
アプローチの方法	◦合理的、実証的手法を用いる	◦非合理的、直観的手法を用いる
主な教育機関	◦学校	◦教会、家庭

第１表の「人間形成の主領域」の項目を見ると、西欧の教育では、知育はヒューマニズムの教育方法で徳育はキリスト教の教育で行っていることが分かる。

②　西欧教育がめざす理想的人間像

この点について注目される第一点は、第１表の「人間形成の主領域」の項目を見ても明らかなように、西欧の教育では知育だけでなく情意の教育（徳育）をも重視し、知情意が調和的に発達した全人の形成を重視していることである。第二点は、西欧には特有の教育目的論が古くから存在していることである。この教育目的論を明らかにすれば、西欧の教育がなぜヒューマニズムの教育とキリスト教の教育との、二つの教育類型から成り立っているかという我々の疑問に対しても、

明確な回答を与えてくれるように思われる。

「西欧近代教育の父」と呼ばれている十七世紀のコメニウス（J. A. Comenius）は、西欧の教育目的について次のように述べている。「人生の究極の目的は、死後天国に行って永劫の幸福を神から受けることである。しかし、死後天国に行くには、現世において完全な生活を送る以外にない。二つの教育は、その準備を行うためのものである。ヒューマニズムの教育によって知識を開発して、科学、技術、文化の進歩を図ることは、現世の生活を快適にしてくれる反面、人間性をむしばみ、人類の生存を脅かす結果を招来する危険性もある。このためキリスト教の教育によって神に対する信仰心を培って神の似姿となり、自己と社会と文化を道徳的に支配することが肝要である。」こうした点から考えて、西欧の教育ではヒューマニズムの教育と共にキリスト教の教育が必要であり、これら二つの教育の中では、キリスト教による道徳教育の方が重要なウェイトを占めているのである。既述のようにイギリスの家庭教育が知育よりも道徳教育を重視する理由は、こうした事由によるためである。イギリス国民の世界に優れた道徳性は、このような西欧における理想的人間像とこうした人間を形成するための、二種類の教育方法に基づいた結果である。

(b) 明治新政府のとり入れ方が遠因

明治新政府は当時の国際情勢と国内事情から、民族の独立確保を国家の最重要課題として、文明開化、富国強兵の国策を樹立した。そうして西欧諸大国をモデルとして、まず教育制度の近代化から着手したのである。明治新政府がモデルとした西欧諸国の教育は、既述のように、教育の目的が死後天国に行って永劫の幸福を神から受けることであるので、きわめてキリスト教的であった。さらには教育方法においても、一つには知識を開発して科学、文化の進歩を図り現世の生活を快適にはするが、反面において人間性をむしばみ人類の生存を脅かす怖れのある知育中心のヒューマニズムの教育方法であったこと、また一つには自己と社会と文化のゆがみを是正するキリスト教による徳育中心の教育方法であったのである。しかるに教育近代化政策を立案していた当時の明治新政府は、徳川幕府のキリシタン禁教政策をそのままに継承していたので、上述の西欧教育の中でキリスト教色の濃厚な教育目的と徳育の二点は除外し、世俗的で知育を任務とするヒュー

マニズムの教育方法のみを採用したのである。このために明治の近代化教育は、教育上重要な徳育までヒューマニズムの教育で知的に行うようになってしまったのである。第二次大戦前の修身教育や訓育、戦後の道徳の時間や生活指導が世俗的、知育的であるのは、このためである。

別言すれば、モデルとなった西欧の教育がヒューマニズムの教育（知育）とキリスト教の教育（徳育）の２足歩行を続けているのに、これをモデルとした明治日本の近代教育は、ヒューマニズム一辺倒のしかも軸足でないほうの片足歩行で今日までを歩んできているのである。まさにこの片足歩行という点に、今日の教育危機の根本原因が見出されるのである。

(c) 人間形成力の点で西欧の教育よりも劣る日本の世俗的、知的道徳教育

日本の世俗的、知的道徳教育が、今日の青少年犯罪、非行の激増、凶悪化の教育上最大の原因となっていると考えられるので、西欧のキリスト教的道徳教育に比較してどのような点が劣るのかを明らかにしていきたい。このため、先ず両者の道徳教育の特徴を一覧表にして示してみたのが第２表である。

第２表　西欧と日本の道徳教育の比較

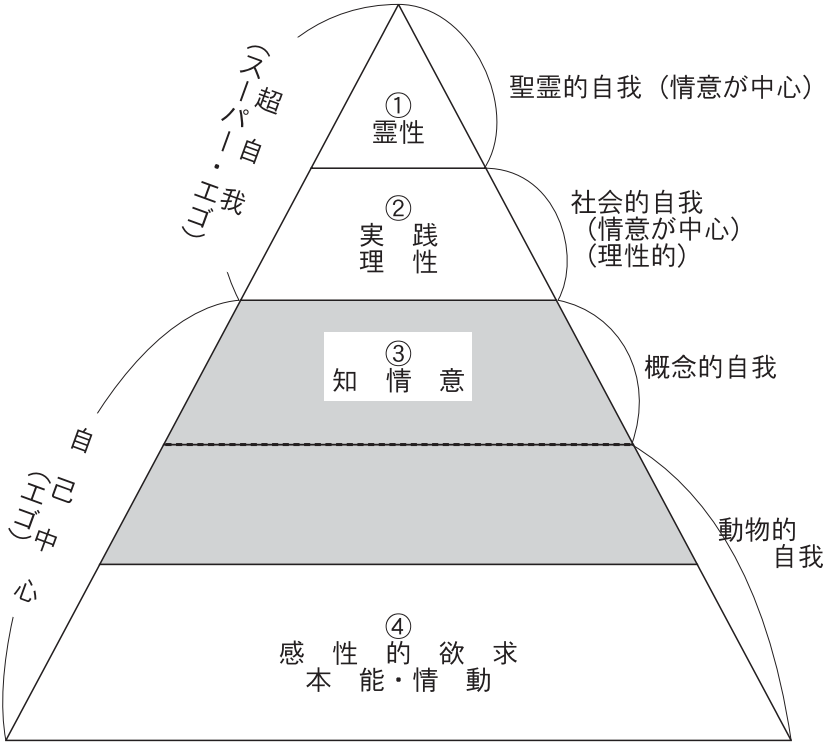
項　目	西欧のキリスト教による 宗教的道徳教育	日本のヒューマニズムの 教育による世俗的道徳教育
教育の主体	◦神対人間の教育	◦人間対人間の教育
教　育　の　場	◦教会（社会）、家庭、学校	◦学校、家庭、社会
教　育　方　法	◦他力的	◦自力的
道徳の種類（超自我の種類）	◦霊性的自我（エゴイズム皆無）	◦社会的自我（エゴイズム残存）
（ルース・ベネディクトの分類）	◦罪の道徳 （神の命令違反）	◦恥の道徳 （社会生活のルール違反）
行為の善悪の結果の影響	◦善悪の結果は、来世にも及ぶ	◦善悪の結果は、現世にとどまる

①　日本の道徳教育と西欧の道徳教育のもたらすものの違い

―実践理性の道徳と霊性の道徳―

まず第１図により人間のパーソナリティの全体構造を明らかにし、その中で日本の道徳教育がもたらす超自我（スーパー・エゴ）は、レベルの低い社会的自我であることを明らかにしたい。

第１図　パーソナリテイ構造



第１図にあるように、人間のパーソナリティは最下層部から最上層部まで全体として４階層から成り立っている。一番下の第④層は本能・情動と感性的欲求から成り立っていて、第③層の知情意の低い層と共に犬やチンパンジーと同様の動

物的自我を形成する。知情意の上層部は言葉を話せるようになった概念的自我で、動物とは違った高等な抽象的思考や複雑な行動が可能となってくる。しかしこの層までの思考や行動は、まだ自我（エゴ）中心である。後にも述べるように、すべての犯罪はこのエゴイズム（自己中心主義）が根源となっているのである。

これに対して第②層の実践理性（意志を規定する理性）の道徳は、第①層の霊性の道徳と共に超自我であって、共にエゴを超越して普遍性を持つに至った心の層である。自我を超えて他に対しての思いやり、愛等の心情である。超自我は、人類特有の心理であって、動物には存在しない。このうち第②層の知的実践理性の道徳は、自我が家庭、学校、近隣、一般社会等で行われている社会生活によって社会化されてできる社会的自我（理性我、理想我、良心）の道徳である。エゴは第①層の聖霊的自我のように皆無ではなくて、まだ強く存在している。

これに対し第①層の聖霊的自我の道徳は、人間の霊性が絶対者に直接的に触発されて帰依し、生けるキリストが心の中に宿るようになって新たな活力を得ると共に、社会的自我は根底から変革され霊性（スピリット）が開発されて、聖霊的自我の道徳となる。換言すれば、エゴの残存した社会的自我の人間が、愛を中心とした利他的人間に変わるのである。社会的自我の道徳の場合は、社会と自我がまだ共存するので、何かを決意する場合、社会（他人）の評判や評価を気にし、相対的立場で決定する。そのためこのレベルの心は、次のような特色を帯びてくる。

一つは自律心がないので、個人としてまだ確立していない。二つには、このため一人の場合は弱く、集団になると途端に強くなる。「赤信号、みんなで渡ればこわくない」である。三つには、周囲のムードに動かされる集団心理の傾向が強い等である。日本の世俗的、知的道徳教育で形成される理性的社会的道徳は、このレベルの道徳であると言ったら、言い過ぎであろうか。

上述したように、西欧のキリスト教の道徳教育によって培われる第①層の聖霊的自我は、人間の心の中で最も高貴な霊性（スピリット）が、神の息吹にふれて呼び醒され、その結果、社会的自我が根底から変革されて初めて形成されるものである。したがってこの聖霊的自我は、世俗的な道徳教育によっては得られず、キリスト教の宗教教育によって初めて形成される高貴な自我である。その特色は、イエス・キリストが自分の心の主となるので、社会的自我の場合とは違って、一

つには他人や社会に左右されることがない。義理・人情などの相対的立場を離れて絶対の立場から物事を決めるので、自律的となり、個人として確立することになる。二つには心の中にすべてをご存知の生けるキリストが内在して指導されるので、「バレなければ、どんな悪いことでもする」といった心がなくなるうえ、強靭な心を得ることで集団のムードに動かされ付和雷同することもなく、したがっていじめ集団に加わっていじめを行うことなど決してない。

②　西欧の罪の道徳に対する日本の恥の道徳

ルース・ベネディクトは、西欧の道徳と日本の道徳の違いを文化人類学の立場から「罪の文化」と「恥の文化」の二つの言葉で表現した。西欧の道徳は、神の命令に従うか背くかによって善悪が決まるのに対し、日本の道徳では、社会生活の慣習やルールに従うか否かによって善悪が決まってくる。このため西欧の場合は、道徳規準が心にとって内面的であるのに対して、日本の場合は外面的である。こうした関係から、両者の道徳には次のような相違が生じてくる。

一つは、西欧の道徳では悪いことをした場合、たとえ社会の人は知らなくても内在する神はご存じゆえ、悪事を行ったことを内心で強く責めるが、日本の場合は悪事をしても心の外の社会や他人が知らなければ、悪事を犯したという意識が乏しいことが多い。「うまくいった」とむしろ喜びさえする。社会や他人に知られ批判されて恥をかくことで初めて悪を自覚し、後悔するのである。二つには第２表にも書いてあるように、西欧の場合は神の命令違反であるので、その罰は現世だけでなくて神の支配される来世にも及ぶのであり、ひどい悪事の場合は、来世においても永劫の苦しみを受けねばならない。これに対して日本の場合は、現世の社会生活のルール違反であるので、その罪は現世に限定される。この点だけに着目しても、西欧のキリスト教的道徳教育にくらべて日本のヒューマニズム的道徳教育は、犯罪に対する抑止力が劣るといえる。このことは、キリスト教教育を欠いたヒューマニズム　オンリーの明治の近代化教育が、今日の未曾有の犯罪の増加と凶悪化の根本原因となっていることを示唆しているものといえるのであり、本研究の核心に関わる重要なポイントなのである。そこで次に具体例を挙げて、この点について詳説することにしたい。

(d) 西欧のキリスト教的道徳教育にくらべて犯罪に対する抑止力が劣る日本の道徳教育

① 尊属殺人に対する抑止力

前に挙げた「勉強しろ、勉強しろ」と口癖のように言って子どもをしつけていた家庭教育に熱心な父母たちが、中学生の子どもに殺傷される事件を例に、西欧のキリスト教的道徳教育にくらべて、抑止力が劣る事由を説明することにする。

第一点は、家庭教育が、ヒューマニズムの教育一辺倒の明治の教育方策に影響されて、知育中心になってしまったことである。家庭教育は、人格形成を本務とするものである。しかるに父母たちは子どもの学校の成績を上げることだけに熱中し、人格形成や徳育などには全くといってよいほど無関心なのである。その結果、子どもの我がままも許容しがちで、過保護の教育がまかり通ってしまう。前掲の第１表にも示したように、ヒューマニズムの教育自体が自我の開放から成り立っている教育であるのに、過保護の教育によってさらに拍車がかけられて、子どものエゴイズムは一層増大していくことになる。父母に対する殺傷は、この強烈なエゴイズムが大きな動機となっていると考えられるのである。

これに対して、家庭教育がもしもイギリスのようにキリスト教の道徳を中心に営まれる場合には、人格形成が家庭教育の中心目的となるため、幼時から利他心を培うしつけがなされる。子どもたちに徹底的に教える言葉は、プリーズとサンキューだとされるように、自己以外に尊重すべき他人がいることを先ず自覚させ、長ずるに従って「人に迷惑をかけない人間」「社会に貢献できる人間」になることを教える。また同じようにキリスト教による家庭教育を行っているアメリカにおいても、「他のために（フォア・アザーズ）」が子育ての標語になっていて、幼少時代から家事の手伝いをさせたり、喜んで他の人々に物をプレゼントすることを教える。自己の不当な欲求を抑える自制心を養い、エゴの自由気ままな発達を父母がコントロールする教育に努めているわけである。

日本のヒューマニズムの家庭教育は知育中心であるため、上記のような利他心や自制心への配慮がなされない場合がほとんどである。したがって父母との葛藤が生じたような時は子どもは強烈なエゴの欲求に駆られて、前に掲げた第１表に示されているように、「自己中心の自力的方法」で直接的に解決しようとするために、父母を殺傷するなどというような悲惨な結果を招くのではなかろうか。

以上のようなキリスト教的道徳教育の抑止力の説明に対して、なお次のような

懸念を抱く人もいるのではないかと思われる。すなわち「こうした子どもが父母を殺傷するような事件は、戦前にはほとんど皆無であった。教育勅語が忠孝の儒教的タテの道徳を強調していたお陰であると思われる。終戦によって教育勅語が失効したから多発するようになった気がする。キリスト教の道徳教育は隣人愛のようなヨコの道徳を強調する宗教である。もし日本が英米のように家庭教育に対してキリスト教的教育化を図るようなことをしていった場合、果たして今日の親子間のタテの関係のゆがみを矯正していけるかどうか、実に疑わしい」というような疑問である。こうした疑問に対しては、次のように回答することができると思う。

隣人愛などヨコの愛を強調するキリスト教の律法（神が命じている生活と行動の原理）にも、「汝の父と母を敬え」との神の命令が記されている。カルヴァンの註では、「彼らは、よし、どのような人物であろうと私たちの父として母として主にあって与えられたものであり、そして主は彼らを敬うことを欲しておられるからである。」と述べている。たとえ父母の側に非があったとしても、殺傷するなどは以ての外であるという厳しい命令である。神の命令であるから、これに対する違反は来世にまで及び、来世においても永劫の苦しみを受けねばならないことになる。来世における永劫の苦しみという国の法令よりも遙かに厳しい掟ゆえに、父母殺傷という犯罪に対する抑止力は、国の法令に比してすこぶる大であるといわねばならない。

最近のニュース報道を見ていて感じることの一つは、人を簡単に殺す事件が余りにも多いことである。極端な言い方をすれば、部屋の中の邪魔な障害物を片付けるように簡単に実行し、その後も後悔の念が少なくて、邪魔な物がなくなってサッパリした気分でいるのではないかとさえ思われるほどである。根本原因は、核家族で少子家庭という環境にあって過保護の家庭教育を受け、過大になったエゴのわがままな欲求に衝動的に引きずられて思わず殺人を犯してしまうというところにあるのではなかろうか。キリスト教では生殺の権を持つのは神のみで、人が人を殺すことは神の「殺すなかれ」という命令に対する重大な違反として大きな罪を犯したことになり、この世で法律違反として刑務所生活の苦痛を受けるだけでなく、神の支配される来世においても、さらに大きな永劫の苦しみを受けることになる。この点が殺人犯罪を抑止する大きな力となるのではなかろうか。

② 集団自殺に対する抑止力

自殺志願の者は一般に孤独、不遇で一身上の悩みが多く、自分自身をさえ忌み嫌い、自分で自己の生命さえ絶とうとする者であるから、理論的には最大のエゴイストであるとも考えられる。この点だけに着目しても、キリスト教の教育は専ら利他心の育成に努めることを本質としていることで、その抑止に有効であるというのが第一点の自殺抑止力を持つ理由となる。キリスト教の教育を受けて信仰心を持ち、今の自分を全部投げ出して救いを求めるとき、神の大きな愛の力によってこれまでの自我は精神的に死んで、代わって新たに聖霊的自我が与えられる。そのため希望を持って生きていこうとする意志が生じ、自殺を断念するにいたる者が少なくない。しかもその後はキリストが友となり、人生の教師となって教え導いてくれるのである。こうしてキリスト教教育においては、自殺志向に対するしっかりとした歯止めがかけられることになり、自殺に対する抑止力が生じると考えられるのである。

二つめには、自殺は殺害した本人が死亡するので、現世の法律では罰せられることはない。しかし前にも述べたように、自殺によって現世の苦悩を逃れたとしても、キリスト教では人に対する生殺の権を持っているのは神のみであるから、やはり神の定める律法への違反者として来世において神より永劫の苦しみを受けねばならないことになる。この点が自殺志向を抑止する力となるといえる第二の理由である。

三つめの理由としては、日本人は一般に孤独に弱く、集団になると強くなる国民性を持つと言われている。これに対して欧米人は一般に心が強靭で、独立した個性を持っていると言われている。その根本原因は、キリスト教信仰の有無に関係していると考えられる。欧米人の場合は集団を離れて孤独になっても、日頃のキリスト教の信仰によって、神とイエスが共在する聖霊的自我が心を支配するので、強靭な個人が形成されることになる。このため集団自殺等の呼びかけには、たやすく同調して加わっていくようなことはない。このような点でもキリスト教教育には自殺志向を抑止する力が内在しているといえるのである。

以上の考察からさらに言えるのは、キリスト教教育は、集団的に行われるイジメや校内暴力等の非行の抑止にも役立つであろうということである。

3．明治の教育近代化の功績面

今日の教育危機の根本原因を究明してきた前項においては、結果として明治の教育近代化の際のマイナス面（キリスト教教育のとり入れを拒んだこと）のみに着眼して解明することとなったが、明治の教育近代化は、他面ではその後の日本社会の進展に大きな功績を残していることを看過してはならない。

具体的にいえばそれは、西欧からとり入れたヒューマニズムの教育によってもたらされた日本の工業化という大きな教育成果である。これが明治教育近代化の第一の功績である。教育の近代化が開始された明治５年（1872）の頃は、日本の産業基盤は収益の低い稲作農業であった。ところが明治新政府がとり入れたヒューマニズムの教育のお陰で次第に工業が発達し、第二次大戦によって都市の工場が殆ど焼失したにもかかわらず、高度経済成長期を迎えて工業は活気を取り戻し、ついに国民の所得は倍増して日本は世界第二の経済大国にまでなった。明治政府の国策であった富国強兵のうち、強兵の方は失敗したが、富国の方はみごとに実を結んだといえる。しかも日本の工業化はその後もさらに進展し、自動車工業等においては本場のアメリカを凌ぐ勢いである。これはひとえに明治教育近代化の際に知育を中心としたヒューマニズムの教育をとり入れたお陰といえる。

明治の教育近代化の功績として第二に挙げねばならないことは、日本の工業化の進展によりキリスト教普及の地盤が整備されてきたことである。明治維新当時の基幹産業であった稲作農業を基盤とする社会の基本単位は個人でなくて、家父長を中心として家族員が滅私奉公を強いられていた家であった。家が当時の村や部落の基本単位で、村落は家の拡大・延長の様相を呈し、個人の行為は地縁と血縁のヒモで固くしばられていた。当時の家や村の生活では「和をもって貴しとなす」の古諺通り集団の和が一番大切で、家族員は自己の欲求や主張を抑えて家父長に滅私奉公するかわりに、家父長からは生活を保証されていた。このため家の拡大であった村落社会においてもタテの道徳が支配的で、村や部落の構成員は、自律性を持った個人ではなかった。明治の新政府が西欧教育のモデル通りにキリスト教教育をとり入れたとしても、当時の国民はこのように個人を無にして地縁、血縁に依存する国民性を持っていたので、個人の自律性と隣人愛というヨコの道徳を強調するキリスト教教育には全く馴染まなかったにちがいない。したがって

明治新政府がヒューマニズムの教育と共に、キリスト教教育をもとり入れていたとしても、農民的パーソナリティを持った当時の国民からは恐らく拒否される結果を招いたことと思われる。

最近では「平成の大合併」といわれているように工業化の進行と平行して、農村的旧町村の都市化現象が急速に進んでいる。このため今日の日本は、農村社会時代の地縁・血縁に依存する古い紐帯が取り払われ、相互に自立した個人と核家族が担い手となる自由で開放的な工業的・都市的社会へと変貌を遂げつつある時代の只中にあるといえる。これまで家父長的家族と稲作農業的村落の集団生活の中で、温かい保護を受けながら育ってきた私たち日本人は、これからは個人として自立せざるを得なくなると同時に、また一方では精神的に孤独な生活に追い込まれていくであろうことが予想される。したがって今後の日本の工業的・都市的社会の時代に要求される理想的人間像は、自由ではあるが孤独な生活の中で生き抜いていく、強靭で自律的な精神を有する個人である。キリスト教の教育は、正にこのような人間を育成する働きを持った教育である。

こうした点に着眼するとき、明治の教育近代化の際のヒューマニズムの教育のとり入れは、西欧のいま一つの教育であるキリスト教の教育をとり入れるための地ならしの重要な役割を果たしてきているとも考えられる。偉大な明治の先覚者たちはこうした推測を心の底に蔵しながら、先ずヒューマニズムの教育をとり入れ、それが工業化の実績をあげた頃、第二の教育改革によりキリスト教の教育をとり入れることを期待していたと考えられないことはない。明治のヒューマニズム的教育改革を行ってからすでに一世紀半近く経過している今日、我々に要請されているのは、明治の先覚者たちの偉大な遺業を受け継ぎ、当時の国内事情によってやり残さざるを得なかったキリスト教教育のとり入れを中核とする、平成第二の教育改革を実施することではなかろうか。

4．明治の教育改革を補完する平成の改革

(1) 全体構想

これまでに述べたところから明らかなように、明治の第一の教育改革は、知育

を本質とする世俗的なヒューマニズムの教育をとり入れたものであった。これに対して平成の教育改革では、西欧のいま一つの教育である徳育を主としたキリスト教の教育をとり入れる。そして明治の改革が学校教育の振興を中心目的としたのに対して、今回の改革は家庭教育の振興を中心目的とするものである。

(2) 部分構想

(a) 公立学校の道徳教育について

平成の第二の教育改革では、公立学校の道徳教育をイギリスやドイツのようにキリスト教教育化していくかどうかが大きな問題となる。二千年以上も前からキリスト教が支配的である西欧諸国と違って、多数の宗教が並立するわが国では、大混乱を招くことは必至である。第二の教育改革においても明治の教育改革と同じように、公立学校教育はキリスト教教育ぬきで、従来通り知育中心のヒューマニズムの教育で一貫するほかないといえよう。したがってキリスト教による道徳教育をとり入れることができるのは、平成の第二の教育改革においても、家庭教育と社会教育の領域のみである。

(b) 家庭教育のキリスト教教育化

家庭教育をキリスト教教育に変革していくことが妥当であると思われる理由は、次のような諸点にまとめられる。

第一点は、家庭教育の本質から考えてみて、当然肯定されるものだからである。子どもは乳幼児期には知育よりもひたすら母親の愛情のもとで育ち、児童期には父母の権威と愛情を中心としたしつけを通じて子どもの情意に働きかけ、道徳的な態度や行動を培う。こうして子どもの人格は形成されていく。このように家庭教育の中心対象は、子どものパーソナリティの中の知識ではなくて情意の部分であり、家庭教育の教育目標は、望ましい道徳性を身につけた人格の形成にある。こういうことから家庭教育は、宗教的な徳育を通じて人格の完成を目指すキリスト教教育に委ねられることで、本来の教育目的を十分に達成することができるといえるのである。

第二点は、全人教育の立場からみて、肯定されるものだからである。人間のパー

ソナリティは知情意全体から成り立っているので、望ましい人間の形成を任務とする教育は、知育を本務とする学校教育だけでは不完全なのである。その点で、家庭教育がキリスト教教育（徳育）によって行われることにより、子どものパーソナリティを構成している知情意は初めて調和的に発達し、子どもの全人格が形成されていく。キリスト教教育によって行われる家庭教育が、今までのような知育中心からイギリスの家庭のような徳育中心となって行くことで、今日の社会で起こっているような、勉強嫌いの子どもに勉強を強要することで結果的に悲劇に繋がるといった事件も恐らくなくなっていくであろう。

第三点は、家庭教育をキリスト教教育で実践することは、ユネスコが第二次大戦後提唱している戦争防止と生涯教育の主旨にも合致するという点である。

ユネスコは第二次世界大戦の勃発を教育的に反省して、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と宣言し、1965年に世界教育の共通目標として生涯教育（生涯学習）の教育目標を提唱したのであった。そしてこの共通目標の中核には、知識ではなくて、道徳的な「慈(いつく)しみの精神」を据えたのであった。「慈(いつく)しみの精神」とは仏教では慈悲であり、キリスト教では愛である。家庭教育は、揺りかごから墓場までの親子の深い愛情関係のもとに過ごすべく運命づけられている家庭生活を場として行われる。その家庭教育が愛の宗教と言われているキリスト教の教育によって営まれていくことは、ユネスコの生涯教育の目標にも合致し、日本人の心の中に平和のとりでを築いていくことにもなる。そしてひいては戦争の防止にも役立っていくであろうことは疑いない。

ユネスコが提唱する生涯教育（生涯学習）の教育理念とキリスト教教育についてさらに述べるならば、我々日本人のこれまでの学習態度を反省すると、有名校に入学するまではよく学習するが、有名校に入学できたらあるいは卒業したら、途端に学習をやめる者が少なくなかった。キリスト教の教育では、死後に神のおられる天の古里で平安な生活を送ることを目標として、この世の生の終わりの終わりまでイエス・キリストの人格をモデルとし、聖書の教えに従って悪をしりぞけ善を積むための学習に若いとき以上に励むことになる。こうしたことから家庭教育のキリスト教教育化は、両親の生涯学習をももたらす結果となり、この点でユネスコの精神にも確実に沿うことになるのである。

第四点は、家庭教育をキリスト教教育で行うようになれば、今日の教育現場を覆っている教師たちの深刻な不安感や危機感は根底から解消していくであろうということである。東京大学基礎学力開発センターが最近行った小中学校長を対象とした全国調査の結果によると、「基礎学力低下の根本原因」は家庭での基本的なしつけの欠如にあるとする者が90％を占めており、また「保護者の学校に対する利己的な要求が深刻」とするのは78％に達しているという。家庭教育を利他性を重視するキリスト教教育化していくためには、親がまずキリスト教に関心を持ち、できれば入信することが望まれる。それによって両親が聖霊的自我に近づくことになり、両親の利己的な性格は修正されていくであろう。今の知育中心の家庭教育のままでは、保護者の学校に対する利己的な要求や批判はさらにエスカレートしていくにちがいない。必要なのは、家庭教育の主体である保護者が、教会教育を受けて利他心を培うことである。このことは家庭教育がキリスト教によって行われるようになって初めて可能である。

第五点は、家庭教育をキリスト教教育で行うようになれば、父母たちは子どものしつけや人格形成等の徳育の秘訣を自然のうちに会得することができるであろうという点である。日本の家庭教育はこれまで知育中心であったために、家庭における徳育やしつけ方について書いた参考文献も少なかった。したがって私たちは、自分の親から受けた徳育やしつけ方を想起して模倣する程度で、徳育や人格形成の原理原則に対しては全く無知のままで過ごしてきた。ところが父母たちがキリスト教に基づいて家庭教育を行うようになれば、人格形成や徳育のモデルがキリスト教によって与えられ、親の身につくようになるからである。

キリスト教が人格形成のために我々に対して臨む基本的態度は、神の権威とキリストの愛とから成り立っている。これと同様に、親の子に対する家庭の教育的態度は、やはり権威と愛の二大要素を備えなければならない。愛だけで権威がない場合は、溺愛や甘やかしの家庭教育となる。したがって子どもは幼児化し、自己中心的で忍耐心が乏しく、近頃よく言われる「すぐ切れる子」となる傾向が強くなる。これに対して愛のない権威的態度は、最近よくニュースになる虐待となり、暴力や欠食のしつけとなり易い。暴力は暴力を生む。近頃の青少年は、親の暴力によるしつけとＴＶ、映画の暴力番組の影響を受けてすぐカッとなり、親に対して暴力に訴える者が少なくない。キリスト教の徳育指導は、すべて言葉（聖

書）で行っている。このことは私たちが家庭教育を行う場合の貴重な示範であるといえる。また子どもたちがその父母を心から尊敬するのは、キリスト教の神やキリストを目標として、たとえ高年齢になったとしても一心に励み続けている姿を見たときなのである。

第六点は、家庭教育をキリスト教教育で行うようになれば、世界のキリスト教国で広く読まれていて世界的なベストセラーとなり続けてきた『スポック博士の育児書』（1946年、アメリカで発行）が、日本の家庭教育においてもそのままに適用され実践され得るようになるであろうという点である。日本でも『スポック博士の家庭教育』『スポック博士のしつけ教育』などの書名で翻訳出版されている。教えられるところの多い育児書なのであるが、筆者が特に感じた２～３の点だけをここに記しておくことにしたい。

一つは家庭教育の目標に関してである。日本のこれまでの家庭教育は知育中心であり、教育の目標は、頭がよくて勉強がよくできて学校の成績がよい子にすることであった。これに対してスポック博士の場合は、キリスト教的な徳育が中心となっており、子どもは自己中心でなく、家庭のために奉仕する家庭のよき一員となるように育てられなければならないとする。そして知識だけでなく、子どもの持って生まれた素質に即した個性を伸ばしてやることが大切だと教える。さらに注目される点は、正義感と隣人愛を身につけて社会のために貢献する人間にまで形成することが重要な目的だとしていることである。

二つは子どもたちに対して協力と尊敬を要求する親の揺るぎない道徳的信念に関してである。私たちは日常の仕事に追われ、また社会の多様な価値観の中で過ごしているので、子どもに対して生涯変わらず協力と尊敬を要求する道徳的信念を持つことは、一般に困難である。このために叱らなければいけない行為をも見過ごすことも少なくない。キリスト教の徳育は、二千年以上もの歴史の風雪に堪えてきた道徳である。家庭教育のキリスト教教育化は、そうした揺るぎない不動の道徳的信念を我々に与えてくれるのである。

(c) 社会教育のキリスト教教育化

家庭教育のキリスト教教育化を推進するためには、社会教育の中核をキリスト教教育に変革していく必要があると考える。

社会教育は欧米では成人教育、継続教育、民衆教育等と呼ばれ、家庭教育や学校教育とちがって主として一般成人や勤労青年を対象とする教育である。キリスト教教育の普及目的のうえから、筆者が特に強調したい社会教育は、公教育行政による上からの啓発教育によって進めるものではなく、教会を拠点とした民間人の自発的・自主的意志に基づいて民主的に行われる社会教育活動である。そこで培われるものは、人格形成を中心としたキリスト教的道徳教育であり、しかもそれは昇天するまで続けられる生涯学習である。社会教育の知育面については、各自の興味・関心に応じて、図書館・博物館・美術館・水族館等の施設を利用して学習すべきだと考える。さらにキリスト教的道徳教育の普及を図るための社会教育の主な拠点についてだが、この点に関しては、キリスト教教会とキリスト教主義学校の二つが考えられる。

以上に述べてきたような方策で人間教育の中核をなす家庭教育のキリスト教教育化を推進していくならば、世界の先進国の教育の実情に優るとも劣らぬ平成第二の教育改革が実現していくことになると思われる。すなわち明治の第一の教育改革が当時の国内事情のためやむを得ず実施してきたヒューマニズムの教育オンリーの片足歩行の教育の欠陥は是正され、そのうえに重要なキリスト教の道徳教育をも加えた西欧諸国並みの、２足歩行の教育が行われることになるだろう。

この場合くれぐれも注意すべきことは、衆知を集めて隣人愛と話し合いによる平和な啓発活動を工夫し、それを基調として展開するということ、そして急がず年数をかけて推進していくということの二点である。知育を中心とした明治の第一の教育改革が短期間で効果をもたらし、西欧以上に工業化を進めることができたような優れた能力を持つ日本である。筆者の主張する平成の第二の教育改革においても、西欧の道徳水準まで意外に早く到達するのではなかろうか。

あとがき

筆者が本稿の執筆を思い立った動機の大部分は、高松新生教会の影響によるものと言っても、決して言い過ぎではない。高松新生教会は、全体の雰囲気が老人や弱者に対して何となく温かみの感じられる教会である。それは、西原孝至牧師

御夫妻の熱心で優れた布教活動と、三好一弘兄、大浦一臣兄を中心とした役員の方々の率先垂範の指導のお陰と思われる。そんな教会なので、日曜日の来るのが待ち遠しい思いで出席させていただいていた。ところが９３歳の秋ごろ（現在は９５歳１１ヶ月）から急に歩行が困難となり、医者の勧めで治療に専念することになった。このため遺憾ながら教会の礼拝も欠席せざるを得なくなり、欠席が長引いて無聊に苦しみ始めた頃のことである。日曜日ごとに配られてくる教会の週報を読む度に次第に次のような思いが心の中を支配するようになってきた。「出席会員の皆さんは教会の諸行事の度ごとにそれぞれに与えられている能力を発揮して、奉仕活動に一心に精進している。長欠中の身ではあるが、自分も教会のために何かできることをして奉仕したいものだ。」このような思いが日増しに強くなっていった。

幸い筆者は、四国学院大学で教育社会学の講義と共に、朝のチャペルの講話をも担当して、ヒューマニズムの教育とキリスト教の教育との二つの教育を十数年間実施した経験を持っている。この貴重な経験を生かして最後のご奉仕をしたいと思い立ったのが、この論文である。

終わりに、『論集』への寄稿についていろいろと仲介の労を取って下さった三好一弘氏（元四国学院大学法人事務部長、現高松新生教会役員）及び掲載についてご快諾下さった文化学会会長の池内功教授（四国学院大学論集発行責任者）に深く謝意を表する次第である。また本稿の執筆を予告した２年前から、その完成を長期間待望してくれていた香川大学稲井ゼミの卒業生の方々（川田豊弘氏を会長とする稲穂会のメンバー）の励ましがなかったら恐らく未完成のままで終わったであろうと思われ、併せて謝意を表しておきたい。文章の修正とパソコン入力は娘の池田邦子が引き受けてくれたことを最後に記して、あとがきとさせていただく。

２００６年１１月６日

参考文献

(1) 竹内寛、『キリスト教と教育』山本書店、1985

(2) 『平塚益徳著作集　Ⅰ～Ⅴ』　教育開発研究所、1985

(3) 『平塚益徳講演集　Ⅰ～Ⅲ』　教育開発研究所、1984

(4) 藤代泰三、『キリスト教史』　ＹＭＣＡ出版、1978

(5) ベンジャミン・スポック博士、曾野・鶴羽共訳、『スポック博士の家庭教育』紀伊国屋書店、1977

(6) ベンジャミン・スポック博士、久米　穣訳、『スポック博士のしつけ教育』講談社、1980

(7) 土屋忠雄、『概説近代教育史』川島書店、1967

(8) カルヴァン、渡辺信夫訳、『信仰の手引』新教出版社、1958

(9) 西尾幹二、『ヨーロッパの個人主義』講談社現代新書、1969

(10) 瓜生武　他、『学校内暴力、家庭内暴力』有斐閣新書、1980

(11) 高田明和、『すぐキレる脳ムカつく心』光文社、1998

(12) 篠田雄次郎、『日本人とドイツ人』光文社、1978

(13) 教師養成研究会、『近代教育史』学芸図書、1962